

今月の聖句

光のこどものようになりなさい

神に愛された子どもとして、神に倣う者となり、愛の内に歩みなさい。キリストも私たちを愛して、ご自分を宥めの香りの供え物、また、いけにえとして、私たちのために神に献げてくださったのです。…
…あなたがたは、以前は闇でしたが、今は主にあつて光となっています。光の子として歩みなさい。 エフェソ 5:1, 8

聖公会八王子幼稚園の正式名は光の子ども学園聖公会八王子幼稚園と言います。学園の名前になっている聖句です。わたしたちの幼稚園はこのことを大切に、光の子どもとして生きていく子どもを育てようと設立されました。

父なる神は愛そのものです。私たち一人ひとりをご自分の子どもとして愛してくださっています。イエスの弟子の一人のパウロは愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさいと皆さんに勧めています。神に倣う、キリストにならうとは、この世の流れ、この世の価値観でいきるのではないということです。この世の価値観は自分を大切に、まず自分が豊かになり、上昇していく事を目指しています。人を蹴落として上になりたい。誰か泣く人があつて

も、それは自己責任だ。苦しんでいるのは自分のなした業の結果だ。でも愛の神はそんな不公平な世界で、自分の子どもの一人が苦しんだり、悩んだり、辛い目に遭うことは仕方がないとは思っていません。神の思ひは、互いに支え合い、愛し合うことを基本においています。自分を犠牲にしてでも隣人を大切にする。他人のために自分の命を差し出すなんて中々できるものではありません。しかし神は、イエスを十字架へと向わせて、愛の模範とされました。教会では、罪の贖いのために十字架に架かれたと言います。犯罪を犯すことだけでなく、罪とは神との関係を拒絶し、神の思ひに反する生き方をする事を指します。本当ならば、そのことの報いを自分で果たさなければなりません。それが自己責任の世界です。しかし神は、そんな事で人間が滅んでいく、救いから除外されることを望みませんでした。だから本来は自己責任として報いを受けなければならない、十字架に架けられなければならないが、神の子を身代わりにしてくださったのです。聖書は神に逆らい、自分中心で生きる生き方を闇の世界と表現します。この世界は闇に包まれている。だとしたらどうしたらその闇を

打ち破ることができるでしょう。天地創造を伝える創世記の物語の発端では、この世に闇に神はまず光あれと宣言します。この世界は神の宣言によって闇ではなく、本来は光の世界だという宣言でもあります。パウロは「光の子どもらしく歩みなさい」教えます。そのためには神に喜ばれることが何であるかを見分けることが大事になってきます。最初の人間のアダムとエバは善悪の知識の木の実を取って食べて罪を犯したと伝えられています。それは自分で善悪の基準を判断するようになったということです。そこで彼らは罪へ、闇へと、悪魔の支配に包み込まれました。現代も同じです。自分で善悪の判断をするなら間違えます。またこの世の価値観によって判断していくなれば、間違った方向へと連れていかれることとなります。ですからわたしたちはいつも自分で祈り、考えて、神の御心を求めていきます。私たちは聖霊に助けられて判断することができるかと教えられています。必ず神からの働きかけで助けられるのです。パウロは最初、イエスに逆らい、イエスの弟子たちを迫害する側に立っていました。最初の殉教者ステパノが石打ちに遭っているとき、石を投げる人々の上着を持っていたと伝えられています。しかし彼は光であるイエスに出会い、光の子どもとされ、光を伝える使命が与えられました。迫害する側から伝道者へと転換されたのです。使徒言行録の 26

章に書かれています。ある日、迫害の手を広げようと道を急いでいるとき、神の光が彼を包み込みます。倒れ伏した彼に神は声を掛けます。

「人々を暗闇から光に、悪魔の支配から神に立ち返らせ、罪の赦しを得させ、御国を受け継がせなさい。」そんな使命を与えられました。わたしたちにも同じ使命が与えられています。イエスは教えています。あなたがたは、世の光です。あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい（マタイ 5:14,16）。暗いと不平を言うのではなく、進んで光を点けよう。この世界に光が支配する、素晴らしい神の国が実現するように働きなさい。前回、皆が家族だよと言う話を書きました。世界中の人々が自分の家族だとしたら、その家族の一人が闇の世界で苦しんでいることを放置できないでしょう。わたしたちがこの世の光となり、世界を変えていくのです。そんな子どもたちになってくれることを願っています。



Christ our Light